



# 女性同士のつながりに関する民俗学的研究： 牡鹿地区の女講中を中心として

|        |   |
|--------|---|
| 著者     | 戸邊 優美   |
| 内容記述   | この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています  |
| 発行年    | 2017  |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba)  |
| 学位授与年度 | 2016  |
| 報告番号   | 12102甲第7990号  |
| URL    | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00147798">http://hdl.handle.net/2241/00147798</a> |

女性同士のつながりに関する民俗学的研究  
—牡鹿地区の女講中を中心として—

戸邊優美

日本民俗学における女性研究の土台を作った柳田國男は、女性研究者の育成にも力を注いだ。女性研究者による女性研究は「女性の分野」として定着し、詳細ですぐれた民俗誌を多数提出してきた。しかし、全体の把握が進められず部分分析にとどまり、「他者」「客体化」の視点を欠いた性別役割研究として批判されてきた。本論文では、①つきあいを形作る女性の力、②倫理的規範性・人間関係の機微を読んだつきあいと結びつき、③多元的なつながりとその要因の複合性を検討することを課題とする。女性同士は必ずしも一枚岩ではなく、標準とされる生き方に対し多様な準拠集団を形成しており、それを超えて結びつくことは容易ではない。本論文は、多様化する女性の生き方を、同性間の結びつきの観点から民俗学的に研究するものである。これは同時に、民俗学が“女性”だけを対象とする研究から脱却し、複合領域としてのジェンダー論に参画していくための試みである。

序章では研究方法と調査地概要を説明する。本論文では、女性同士のつながりを次の二つの枠組で捉える。一つは、女性の講集団である。それは信仰や息抜きのものであると同時に、女性の準拠集団として村落社会に位置付けられてきた。講集団による共同性と排除は、その社会における女性同士のつながりそのものといえる。もう一つは、近所や親戚とのつきあい、友人関係など、個人を基調とするつきあいである。講集団に参加しなかった人びとを含めたつながりの様相を明らかにすることで、女性同士のつながり方の全体を捉える。以上の枠組みから課題に取り組むために、宮城県石巻市牡鹿地区の女性たちに着目する。牡鹿地区における村落組織の特徴として、強固に結びついた女性の講集団の存在が挙げられる。その講集団は近世より「女講中」と呼ばれ、平成10年代中頃まで活動していた。女講中は信仰や娯楽の側面だけではなく、組織的な活動や経済的基盤があり、集落における女性同士の結合・共同体そのものとして機能してきた点が特徴である。第一部（第一章～第三章）では女講中を中心に、牡鹿地区の各集落における女性の社会組織と秩序を考察する。他方で、非講員を含むつきあいや、多様な職種・出身地の人の混住による様々な関係の絡み合いがあることから、第二部（第四章～第六章）では、女講中とは異なる観点から女性同士のつながりを取り上げ考察する。

第一章「女講中と婚礼」では、女講中による活動の社会的意義に着目する。牡鹿地区では、昭和30年代までは自宅での婚礼が主流であり、嫁入道具も嫁入行列とともに実家から婚家に運ばれた。その道中あるいは婚家で行われるのが、嫁入道具を引き渡す「長持渡し」である。牡鹿地区では女講中がその担い手であり、特に花嫁を集落から送り出すときの長持渡しでは、婿方との間で長持金という礼金をめぐり激しいやりとりが行われた。また、女講中の婚礼道具にも、婚礼への関与がうかがえる。各集落では、祝儀用の膳碗や食器、長持、婚礼衣装を女講中が所有し、婚礼を行う際には有料でそれを借り受けることができ

た。実家からは出身集落の婚礼衣装を身に着け、中宿で嫁ぎ先集落の婚礼衣装に着替えることで、花嫁の帰属は一目瞭然であった。以上の事例は、花嫁の身柄の異動を家同士だけではなく集落同士のものとしている。そして、娘から嫁となった花嫁が女講中という既婚女性集団とのつながりを持ったことを示している。

第二章「女性の一生と講集団」では、個人のライフコースと講集団の対応関係を考察する。カトク（家の相続者）の妻となった嫁はアネと呼ばれ、女講中に仲間入りする。女講中は地蔵講と山神講等を組む既婚女性の講集団であり、38歳あるいは42歳の年齢制限がある。女講中を抜けると観音講に入り、ガガと呼ばれ、家でも中心的な働きをするようになる。さらに観音講を抜け、バンツァマと呼ばれるようになると、念仏講に入り、仏事・法事に専心した。女講中には年齢規定があるものの、それ以降はむしろ家における立場と関係している。家における権威はアネよりガガとバンツァマの方が強いが、集落における社会的役割は女講中が最も多い。女性全体の中でも主要組織は女講中であり、経済力も有していることから、アネ個人の力では及ばない活動の実施が可能となることがうかがえる。

女講中のもう一つの大きな特徴として、経済的な自立が挙げられる。第三章「年序集団体系の中の女講中―牡鹿地区における契約講研究の再検討と女性集団の相対化―」では、「長持渡し」で得られる長持金や御祝儀、婚礼道具の貸出による収入がいかに関用されていたかを検討する。女講中は、行政区や男性の契約講に依存することなく、婚礼道具の購入や石塔石仏の修繕、他集団への寄付などを含めた独自の活動を行うことができた。契約講が冠婚葬祭に全く関与しないことと比べても、女講中は活動を主体的におこなっており、男性とは異なるつながりの捉え方がうかがえる。こうした女講中の側面は、竹内利美をはじめとする牡鹿半島社会の先行研究が言及してこなかった点であり、女性側の視点も併せてはじめてその社会の全体像を明らかにできることを示している。

第四章「「入れない嫁」から「入らない嫁」へ―高度経済成長期におけるつながりの変容―」では、集落における女性同士のつながりについて個人の視点から考察する。女講中に仲間入りできるのはアネのみであり、「入れない嫁」が女性たちの間で講員並みの発言力とリーダーシップを発揮するのは困難であった。これに変化が生じ始めたのは昭和30年代からで、アネの中に「入らない嫁」が現れるようになった。「入らない嫁」の増加につれ女講中の規模は縮小し、婚礼による収入の減少も重なって、昭和50年代～平成10年代にかけて各集落の女講中は衰退した。女講中を中心としたつながりの変容は、女性の進学や就労、産業の発展等社会背景と密接な関連がある。集落女性はつながりを主体的に選択するようになり、活動目的の明確なグループ形成が志向されるようになっていった。

こうした流れと入れ替わるように強まっていったのが、集落を超えた女性同士のつながりや集団の形成である。第五章「外国人嫁の居場所とネットワーク」ではその一例として、外国人嫁を取り上げた。牡鹿地区において外国人嫁は少数であり、家や集落への適応を余儀なくされるマイノリティとなっている。フィリピン人嫁は、牡鹿地区内に暮らすフィリピン人同士で緊密に連絡を取り合い、情報共有や問題解決を図っている。こうしたネット

ワークを持たない韓国人嫁は、家業や集落でのつきあいに積極的に臨んできた。彼女たちは外来者である自分への視線を敏感に察知しており、それを見つめ返す視線には自らの居場所を確保するための戦略性が見受けられる。

第六章「摩擦とつきあい ―災害を経た女性同士のつながりの変化について―」では、つながりの維持について東日本大震災の前後をめぐり検討した。甚大な津波被害を受けた牡鹿地区では、長い避難生活と復興に向けた取り組みの中で、共助や配慮とともに関係の摩擦も生じていた。摩擦もつきあいの一部であり、つながり続けていくためには落としどころを見出したり、あえて表沙汰にしないつきあい方もある。また、つながりの希薄さを認識し、衰退していた講集団を集落女性のつながりの形として再結成する動向もみられた。復興過程では性別役割の攪乱も起きており、同性間のつながりという視点自体の見直しも示唆された。

以上の事例を通して明らかになった点と課題に対する結論を、終章で述べる。女講中を主軸とする女性たちの社会と、個人同士のつきあいに見える多様なつながりが重層し、前者が強い時には後者はその社会規範に基づいて機能し、後者が重要度を増すと前者の重要度は弱まるということが明らかになった。最初に抽出した三つの視点からこれを考察すると、まず、女性同士のつながりが男性による組織や社会規範とは異なる論理を持っていることが指摘できる。集落自治を担う男性組織や、戸主やカトクのように家の代表となる男性たちに対し、女性が表立って決断し主導することは少なく、女性集団は補佐的・従的なものとして位置付けられることが多かった。しかし本論文では自律的な女性同士のつながりを明らかにし、村落運営や構造の視点から女性集団を評価するだけでは全体における位置付けを見誤り、女性研究の「部分化」に陥る可能性があることを指摘した。次に機微を踏まえた関係形成の視点からは、女性同士のつながりは男性同士のそれとは異なる文脈で形成される場合があることが明らかとなった。上野千鶴子は地縁・血縁・社縁に対し、都市部における女性の関係形成を「選択縁」あるいは「女縁」と呼んだ。その主張から30年後の現在、地方村落では選択縁と地縁・血縁が複合したつながりがみられ、社会的にも影響力を帯びている。そして友人の視点からは、情緒的と見なされてきた女性同士のつながりにおける情報のやりとりを述べた。女講中講員と非講員の社会参画の差、目的や感覚を一致する者同士のつながりの強まり、一度失ったつながりを取り戻そうとする動きは、いずれもつながりにより得られるものを示している。また、社会規範や関係の機微に依拠した「インフォーマルなつながり」において、そのつきあいで送受される情報は、女性同士にとって重要な意義を持つ。

性別役割として固定された“女性”についてではなく、“女性”たらしめているものは何かと考えるとき、女性同士の主体的なつながりはその一面を示すものとなる。今後求められるのは対象化された“女性”研究だけではなく、“女性”を切り口とした分析であり、性別に潜む力や階層などに気づくことによって、二項対立的な説明が困難な、複雑で現代的な問題にも踏み込んでいくことができると結論付けた。